

ハ ワ イ

先住民文化フラと観光地形成の關係に着目した歴史地誌

The Historical topography of Tourist Spot Formation and Indigenous culture of Focusing on THE Hula

宮原 英利[※]

Hidetoshi Miyahara[※]

Abstract

It has been believed since ancient times that the ruling class of Hawaii traced a continuous lineage to God.

Hula functioned as a means to assert the legitimacy of kingship in continuing the sacred line.

However, contact with white society began the collapse of the Native Hawaiian culture, which had continued to live in the Stone Age. The traditional culture and rituals of the indigenous people was rejected as heresy by Christian missionaries and traditional arts, such as hula, were also prohibited. The Kingdom of Hawaii thereafter changed to a political system lead by whites, with nation formation and national infrastructure proceeding based upon Christianity. However, in the 1970s, the demands of minority ethnic groups in the Civil Rights Movement that occurred in the United States awakened also the national consciousness of Native Hawaiians, and the creation of hula, a new Indigenous traditional culture, began.

In this paper, I am focusing on the history of the transformation of the hula, to consider the process by which Hawaii was converted into a world tourist destination by the power of its charm.

Key words : Hawaii, Hula, world tourist destination, native hawaiian

1. はじめに

日本人にとって、ハワイという土地への憧れをイメージさせる「要素」は、やはりフラであろう。居住地域の違いは異なった文化を形成し、人間の移動によって再構成され、その地域での新たな文化が形成されていく。ハワイの歴史は所説あるが、西暦500年から900年の間に、マルケサス諸島やタヒチの島々から渡ってきたポリネシア人が定住してから始まったと考えられている。彼らは、約1000年以上もの長い間、タヒチなどの島々との交流を続け、今日のハワイ文化の基礎を作りあげていった。文字を持たなかった彼らは、文字に代わって、歴史や神話を伝承する手段となったのが祈りを捧げる「チャント」とその内容を具体的に表現する「フラ」であった。つまり、神々への信仰心をフラの踊りで表したのである。古代ハワイ社会の支配者階級は神の系譜に連なるとされ、一般民衆に災いを起こす自然の怒りを鎮めることのできる最高の力、マナを持った者が最高権力者であり、神聖化された王であった。その王の正当性を主張する手段がフラであったのである。

本論では、ハワイ王国の正当性を主張するよりどころとなったフラの変容の歴史に着目し、この人々を魅了する力でハワイを世界の観光地へと形成していった形成過程を述べていく。

※日本経済大学経済学部経済学科

2. ハワイ王朝の時代

(1) 地 勢

ハワイは太平洋上の北緯20度、東経155度から160度に位置し、大小125の島々からなる、アメリカ合衆国50番目の州である。主要な島は、北端に位置するカウアイ島で、地質学的に見ると最も古く、4番目に大きい。カウアイ島から南東に向かってオアフ島、マウイ島、そして一番面積の広いハワイ島の4島が順に位置している。(表1) その歴史は長く、西暦500年ころからポリネシア人が渡ってきたところから始まったと考えられている。そのハワイ諸島が世界に知られたのは、キャプテン・クックが1778年、世界探検の途中で発見し、報告したところから始まる。

表1 ハワイ諸島別面積

島	面積 (平方キロ)
ハワイ島	1547.8 (東京都の約70%)
オアフ島	10,433.5 (東京都の約4.7倍)
マウイ島	1999.4 (東京都の約86%)
カウアイ島	1430.5 (東京都の約65%)
モロカイ島	674.5 (東京都の約30%)
ラナイ島	365.3 (東京都の約16%)
ニイハウ島	175.0 (東京都の約8%)

出展 (State of Hawaii Data Book, 2010)

(2) ハワイ王国の樹立

ハワイの、初期の定住者たちの社会、政治体制は、中世ヨーロッパの封建制度に似ており、それぞれの島は世襲制度による「首長 Alii nui (アリエヌイ)」によって統制されていた。首長は、特権階級の「廷臣=当時の神官、聖職者」や芸術、科学などに優れた者たちに土地を与え臣下として従えていた。一般の民である農民や漁民たちは外敵などからの保護に対する返礼として、収穫や捕獲物の一部をそれぞれの首長たちに献上することが義務付けられていた。全ての法は「タブー制度 Kapu (カプ)」の上に成り立っており禁制を犯した罰はときとして死をもって償われた。このような社会・政治体制のもとで、ハワイ文化の基礎が形成されていった。

そして、1750年代の後半、ほぼ1世紀に渡りハワイの島々を完全に統治することになるカメハメハI世が誕生。ハワイ王朝時代の幕開けとなった。1782年、ハワイ島を制圧し勢力を充実させたカメハメハは他の島々の制覇を図る。この彼の成功は、貿易や捕獲で取得したイギリスの武器や帆船、又ヨーロッパの戦術の巧みな利用に帰するところが大きかった。実は、1778年のクックがハワイにやってくると、その後、ヨーロッパやアメリカからの船が頻繁に来島するようになり、カメハメハはそれらの外国人の文明である西洋の武器をいち早く取り入れたのである。そして、大半の島を支配下に置き、1795年に「ハワイ王国」を樹立した。カメハメハは、王国樹立後も、外の世界との関係を維持し、王権の強化に活かし続けた。

(3) フラの機能

古来よりハワイには文字が存在せず、神話や伝承、神々への信仰心、支配階級への崇拜は、詠唱詩であるチャントとフラをつうじて表現され、継承された。踊りであるフラはチャントの歌詞の内容を身体的に表現するものであった。チャントには支配者階級の系譜を讃えるものや神々の信仰に係わるものは専門家によって創作され継承されたが、それ以外のチャントは階級を問わずその時々創作された。創作されたチャントはハワイアンのみ、あるいはその内部の特定の集団のみがその意味を理解することが出来、理解の共通をもってその集団の結束を固めた。従って、共通のチャントに合わせて踊られたフラもまた集団の結束を強固にする役割を果たした。また、公式の祝祭などで披露されたフラには神々にまつわる神話を伝え、それらの神への信仰心を表現するフラはそのような場での中心的存在であった。このように、一般民衆のフラと支配階級のフラとの間には明らかな違いがあり、支配階級のフラは自らは神の系譜につながっており、その神聖性を具現化する手段であり権威づけであったのである。

(4) 伝統的文化の否定（フラ禁止令）

1819年、カメハメハ1世が没し長男のリホリホが即位しカメハメハ2世となる。このカメハメハ2世統治下の1820年にアメリカからキリスト教最初の宣教師が家族と共にやってきた。彼らは、伝統的なハワイアンの生活を「ただ、ただだと過ごす怠惰な生活」と非難し、ハワイアンの価値観や風習を否定し自分たちの信仰に基づく価値観を広めるための布教活動を熱心に行った。貴族の中にはキリスト教に改宗するものがでてきて、数多くのハワイアンがキリスト教に改宗し「タブー制度 Kapu」に基づくハワイ伝統的な宗教を信じる者の数は減っていった。

連続と継承されてきたこの神聖で、かつ統治の正当性を持つフラや、伝承機能を持つフラを宣教師たちは「みだらなもの」として徹底的に弾圧し、ついには、1830年頃、カメハメハ1世の寵愛を最も強く受けていた妻のカアフマヌが、「フラ禁止令」をだし、以後、約70年の間、王権の権威であった「フラ」は歴史の淵へ追いやられていった。その後の王権の権威はキリスト教を基盤とした国家形成が進行していくのである。これは、ハワイアンの支配者階級による伝統的信仰の否定であった。支配者階級の権威はその神聖性によって正当化されてきた。また、民衆の神々への信仰心、支配者階級への崇拜はチャントとフラを通じて表現された。このような社会秩序、階級制度は、白人達の手で徐々に剥奪されてしまったのだった。

フラが国王を神格化して、王権の正当性を誇示する機能を有していたものを、自らが否定してしまっただけの後の統治体制は政権維持のために白人を積極的に利用したが、ハワイ社会は白人の数が増え、白人を中心とする外国人は王朝の政権に大きな影響力を持つようになってきた。特に、古代から継承されてきた土地は、王の名においてそれぞれの首長によって統治されており、私有という概念は無かった。しかし、1850年に、外国人の土地私有が認められ、土地が初めて売買の対象となったのである。土地の売買に精通している白人たちは、広大な土地を次々と入手して行きサトウキビ栽培を拡大し、莫大な利益を上げていき、ハワイ経済の基幹産業へと発展して行く。白人以外でも、それぞれの専門性をもって、ハワイ政府において働いたりして、ハワイ社会の実権を握るようになっていった。



画像1 1850年代のフラ・ガール



画像2 1850年代のフラ・ガール

カメハメハ3世は、このような情勢の中で、自らの権力を守り、変化する時代に適応するためハワイ初の憲法を制定した。新憲法ではハワイ初の議会を設立し、最高裁判所を設けた。形のうえでは、立憲君主制が確立されたのである。しかし、この憲法も白人指導者たちにより改憲を余儀なくされ、王の持つ権力を弱体化させていった。

その後のカメハメハ4世の在位は、1855～63年と短く君主制擁護派と反対派間の闘争が絶えなかった。1863～72年の間在位したカメハメハ5世は、独身であったため王位後継者はいなかった。1872年に王が死去するとカメハメハ王家は終焉を迎えた。その後、王は議会で選出されることとなった。

議会で選出された6代目のルナリロ王は在位2年と短命であった。しかし、この在位中にアメリカ政府はハワイの地理的条件が対アジア戦略上重要な価値を持っていることを認識し、砂糖の関税を無税とする代わりに真珠湾をアメリカに譲渡する相互条約が締結された。こののち、白人優位な政治体制、アメリカ支配が進んでいくのである。

(5) フラの復興

1874年～91年の間在位したデビット・カラカウア王は、フラを深く愛し1883年の戴冠式と1886年の自らの50歳の誕生日を記念する式典においてフラを堂々と披露した。「淫らな」「異教の」踊りとして長い年月抑圧されてきたことに真っ向から反対しハワイアンにとってのフラの重要性を主張したのである。彼は、「フラは心の言葉であるから、ハワイの人びとの心そのものである」と宣言しハワイ社会に不可欠なものとして復活させたのである。又、彼自ら国歌「ハワイ・ポノイ」の作詞を行い、ハワイでは少数民族になっていたハワイ先住民の自治権確立を図った。現在は、ハワイ州の州歌となっている。

●ハワイ・ポノイ 和訳

誇り高きハワイの民よ 王を崇め讃えよ この国を治める君主である王を
われらの父なるカメハメハは 自ら槍を手に戦い この国を守った

誇り高きハワイの民よ 王を信頼せよ 王の血は若き世代に受け継がれていく
誇り高きハワイの民よ 忠誠心に満ちた民よ これを心に刻み留めよ

カラカウア王はハワイの文化や伝統を保存し、再興し、さらに創り上げた点は高く評価してよいのではないだろうか。一方、他国の王室を訪問し、各国の華麗な王族に心惹かれ、帰国後、現在、ホノルル市内に置ける最も有名な観光資源の一つとなっている「イオラニ宮殿・Iolani Palace」を建設したのだが、産業界からは、無駄遣いと非難された。現在、ハワイ王朝を象徴する貴重な建築物として、また、ハワイ王国存在の歴史として残ったのであった。

1891年、カラカウア王が死去した後、最後のハワイ王朝の王となったのは、妹のリリウオカラニ女王である。リリウオカラニ女王は、1891年～93年の間在位しカラカウア王以上に積極的に君主の権力を強めようと、ネイティブハワイアンによるネイティブハワイアンのための政府を作ることに尽力した。しかし、1893年、初期宣教師教団の息子サンフォード・ドール Sanford Dole に率いられた白人達のクーデターにより新政府の樹立を宣言した。女王はただちにアメリカに対し王政復古を訴えた。アメリカ大統領クリーブランドはそれに応え、一時、女王は王権を回復したが、白人たちはドールを大統領として1894年、共和国を設立した。結果、女王は王位を剥奪され幽閉の身となってしまい二度と王位に就くことはなかった。ここにハワイ王朝は終焉を迎え、1898年、アメリカに併合された。カメハメハ大王によるハワイ統一からわずか88年後、ハワイ王国はアメリカ合衆国の一部となりハワイという国は滅び、アメリカの一部となってしまった。この併合の裏にはアメリカとスペインとのあいだで戦争が勃発し、アメリカとしては、スペイン領フィリピン諸島への攻撃と占領の足掛かりとしてハワイは太平洋における軍事的に重要な地理的条件下にある存在との再認識があったからである。ハワイは、先住民ハワイアンの意識とは関係なく、アメリカという強大な軍事力を持つ大国の一部として呑みこまれ、植民地化が進み、サトウキビ産業はハワイの基幹産業として発展し、アメリカは、ハワイのパールハーバーを拠点に軍事基地化していった。

3. 観光地形成

(1) ワイキキの開発

ワイキキの浜辺には大勢の観光客が海水浴やマリンスポーツを楽しんだり、カラカウア通りにはさわやかな南国の風を感じながらウインドウショッピングを楽しむ観光客が大勢みられる。これらの観光客は何に魅せられてハワイを訪れたのであろうか。彼らの持つハワイのイメージとはどのようなものであろうか。

19世紀末にアメリカに併合されてからワイキキの観光開発はハワイの経済的発展の重要な手段とし

て位置づけられ開発が進められたが、元々、ワイキキが保養地としての価値に気づいたのは先住民の支配者階級であった。湧水が豊富で先住民の主要な食料であったタロイモの栽培が行われる土地であり、また、貿易風がコーラウ山脈を越え、ワイキキの北にあるマノア溪谷を通り冷やされて心地よい風となってワイキキを吹き渡っていく。ハワイは、熱帯に位置するにもかかわらずこれらの恵まれた自然条件によってワイキキは豊かで住みやすい土地になったのであった。発展するホノルルのそばにあり最適の保養地としての環境を持つワイキキの価値が投資家たちによって高く評価され、リゾート開発へと進んでいったのであった。

最初にワイキキに建設されたホテルは、1899年創業のモアナ・ホテル（客室数75部屋）であった。このホテルが出来たことにより、今までホノルル市内に滞在していた観光客はビーチのそばのホテルに滞在することが出来るようになったのである。

1920年代に入ると、アメリカ本土との間に大型の定期客船が就航するようになり、大量輸送という交通革命の果実はハワイに新しい観光産業をもたらすこととなった。この大型客船就航に伴い、大量の観光客を収容する宿泊施設の建設が不可避となり、大型のホテルの建設が計画された。1927年にロイヤル・ハワイアン・ホテルが出来上がり収容人員を大幅に増やすことが出来るようになった。訪れた観光客の楽しみは、夕暮れから始められる古代からの宴会のルアウ（Luau）と、その後に行われる先住民の踊りや音楽であった。先住民は、観光客相手のショー・ビジネスに動員されたのである。フラは、本来、打楽器とチャント（詠唱歌）に合わせて踊ったが、このような場での踊りは、スチール・ギターを用いたハワイアン音楽に合わせて踊られた。聖なる宗教儀式であった先住民文化フラは、観光業者の主導により変容を余儀なくされた。この変化にフラの指導者クム・フラの多くが批判的であったが、観光化による現実を積極的にとらえ新しい芸術として創造・発展させようと取り組むクムもいた。世界のリゾート開発の先駆けとなったハワイは、一方で先住民の生活や文化に重大な変化を及ぼしていったのである。

（2）観光地の認知度アップ

①メディアの活用

上述のように、観光設備の充実は、ハード面・ソフト面で順調に進んでいったが、1929年にウォール街から起こった恐慌はハワイへの観光客を一気に減少させてしまった。経済不況は観光業に取って発展の阻害要因の一つである事が、この時代の、この事例からも確認できる。そこで、観光業者達は、南国ハワイの観光宣伝を行い観光客誘致を始めた。彼らは、本土に住む白人たちがどのようなハワイに心を奪われるのかをよく知っていた。本土各地の新聞に豪華客船の観光広告、熱帯の植物の写真、微笑みながらフラを踊る大勢のフラ・ガール達など、南国の楽園ハワイを感じさせる演出であった。また、本土の新聞社の記者を招待し、現地を体感してもらい、その体験を記事にして発信した。そのほかには、映画の制作もあった。ハワイ・ツーリスト・ビューローは数多くの宣伝映画を成作し、全米各地の系列映画館で放映された。このようにして、ハワイのイメージが各地に広がっていった。また、1935年には宣伝活動の一環としてラジオ放送「ハワイ・コール」が始まり、ラジオの電波に乗せ、ハワイアン音楽と波の音が届けられた。これにより、各地の人々は、一度は行ってみたい南国の楽園イメージが出来上がっていったのである。

②観光地ハワイのイメージ

観光地形成に取って、まさに手本となる南国ハワイであるが、楽園ハワイのイメージとはどのようなものであろうか。朝・夕の太陽の光に美しく輝くダイヤモンド・ヘッド、絶え間なく聞こえてくる心地よい波の音、豪華で居心地の良いホテルのテラスで感じるさわやかな風。自然の美しさと温暖な気候は南国の楽園ハワイには欠かせないイメージであったのである。同じように、先住民の娘たちが南国の音楽に合わせて踊る魅惑的なフラであった。娘たちのフラはハワイをイメージする代表的な存在となっていった。

③ハワイの音楽

来島する観光客のため、ホテルでは毎夜、ハワイアン音楽が演奏されフラ・ショーが行われ、先住民たちは、これら舞台を飾る重要な主役となった。しかし、観光客に提供されたフラも音楽も先住民本来のものではなかった。あくまで、白人たちによって作り上げられたものであった。特に知られている、スチール・ギターを響かせる演奏法はハワイアン特有と思われがちだが、実は観光客相手のバンドから生まれたものである。これらのハワイアン音楽を演奏するために、先住民のアーティストが構成されていったが、彼らの演奏する音楽は、すでに伝統からは隔たったものになっていった。

④ハリウッド映画の効果

1920年代のアメリカ経済は、活況を呈し、大量消費時代に入った。特に自動車産業はフォードに代表される大衆車の大量生産が行われた。1900年代の無声映画の時代から発展してきた映画は、大衆向けメディアであった。映画を見ることは、他の娯楽に比べ安価であり、工場労働者など、ブルーカラーでも支出できた。そこで、30年代の都市大衆は恐慌の絶望と退廃からの逃避を映画に求め、映画もそれに答えるように、官能的な映画製作に力を入れた。その素材としてハワイ先住民の扇情的な踊りや民族衣装は最適であり、数多くの南国の楽園ハワイで官能的に踊るフラ・ガールが利用された。ただし、主役を演じるのはセクシーさを前面に出した白人女性であり、画面を飾るフラ・ガール達も、一部を除き、同じくヒスパニック系の女性達であった。この結果、大衆には魅惑的なフラ・ガールのいる南国の楽園ハワイのイメージが植え付けられ、一度は行ってみたいという憧れを膨らませていったのである。

このように、アメリカ本土に住む白人達への観光誘致に色々な形で利用されたフラは、それでも、旧来の伝統を保ちながら、同時にウクレレやギターなどで奏でられる西洋的なメロディに合わせて演じる観光客用の新しいフラを創り上げていったのである。

⑤日米開戦

1941年12月7日、日本軍のパールハーバーへの奇襲により、ハワイは戦時体制に入った。もともと、ハワイは太平洋の一大軍事基地となっていたが、これによって、太平洋における大切な戦略拠点としてますます重要度を増していった。直ちにアメリカはハワイへ大量の兵士を本土から送りこんだ。ハワイはアジアや太平洋の戦場とアメリカとを結ぶ中継地点だったからである。急激な軍関係の施設建

設や、人口の増加でハワイの経済は大いにうるおった。また、皮肉にも、大量の兵士たちがやってきたことは、その後のハワイブームのきっかけにもなった。それまで、アメリカ人にとってはお遠い存在であったハワイは、戦争を契機により身近に感じられるようになったのである。死と隣り合わせの兵士たちにとって一時的にもハワイで楽しい時間を過ごせたからである。ここでも、パラダイスとしてのハワイイメージがいつそう広まり始めた。しかし、戦争特需が終わると、今まで大きく伸びてきたハワイ経済に陰りが見えることが予想されることから、更なる観光産業の開発がおこなわれることとなるのである。ただ、戦争が終わったとはいえ、ハワイはアメリカにとってもっとも重要な軍事基地であり続け、ハワイの経済にとっては、軍事関連産業は、観光産業に次ぐ重要な産業となったのである。

4. 新たな観光開発の始まり

(1) ワイキキ再開発

1930年代のワイキキはまだ一部の金持ちの高級リゾートで、高級大型ホテルであるモアナ・ホテルとロイヤル・ハワイアン・ホテル（ピンク・パレス）だけで、残りは平屋か二階建ての個人住宅であった。上述したように、ハワイ経済の戦後不況の打開策の一つとして取られたのが、ワイキキ地区の開発であった。戦後のハワイ観光産業の特徴は、徹底的に大衆化された点である。そこで、観光開発業者は個人住宅を買い上げていき、本土からの大衆旅行客を受け入れるための宿泊施設を次々に建設していった。大型化していったホテルの一つとして、1955年開業のプリンセス・カイウラニ・ホテルがあるが、このホテルの客室数の推移としては、開業時、296室、1960年にカイウラニ・ウイング210室が増設され、さらに、1970年には29階建てのアイナハウ・タワーが完成し、1152室という大型リゾートホテルとなった。そのほかにも多彩なホテルが開業していったが、その中でも特に大型のホテルとして、1971年開業のシェラトン・ワイキキ・ホテルがある。客室数は何と1636室と超大型のホテル誕生となった。1950年代より建設が進められてきた大型ホテルへの宿泊客は、1959年からジェット機の就航と米本土からの航空路線も拡大しマス化の一途をたどり、ますます伸びていった。この時期、日本人向けの「最新布哇案内」でハワイの旅のハイライトとして紹介されたのが「フラフラ踊り」である。「数人の娘が豊かな肉体美」をみせる踊りであるとか、「原始的な踊りは確かにみものである」とかの表現で読者の興味を煽り立て、ここでもフラに対する日本人のイメージを定着させていった。

(2) 立州化

大型ホテルの建設が進む時期の1959年、ハワイはアメリカ50番目の州となった。当初のアメリカは、白人人口が半分にも満たないことが、立州化を拒む理由としていたが、大戦で、ハワイに住む日系人をはじめ、移民たちは命をかけてアメリカに忠誠を尽くした。そこには真のアメリカ人となった移民たちがいて、すでに立州化を拒む理由はなくなったのである。

表2 【人種構成】(2010年国勢調査)

• 白人系：33.6万人 (24.7%)
• フィリピン系：19.7万人 (14.5%)
• 日系：18.5万人 (13.6%)
• ハワイアン系：8万人 (5.9%)
• 中国系：5.4万人 (4.0%)
• 韓国系：2.4万人 (1.6%)
• 黒人系：2.1万人 (1.6%)
• サモア系：1.8万人 (1.3%)

表3 州人口の推移

年	総人口
1950	499,794
1960	632,772
1970	768,559
1980	964,691
1990	1,108,229
2000	1,211,535
2010	1,419,561

出展：米国商務省統計国勢調査局2014年推定

ハワイにおける民族構成の特徴は、どの民族グループでも、単独では過半数になり得ないことである。(表2) ハワイがこのように多民族社会になった理由には二つの要因がある。一つはクックの来島以来、ヨーロッパ世界から持ち込まれた多くの病原菌によって先住民人口が激減したことである。クック来島時のハワイ先住民人口は約30万と推定された。その後、19世紀の前半の50年間に15万から8万へと激減。もっとも人口の減少した1872年の記録ではハワイ全土で5万6897にまで落ち込んだのである。(表4) もう一つは、19世紀以来、アメリカ本土から来た企業家や、宣教師から転身して始めた砂糖キビプランテーション農場のために必要な労働者をアジアから大量に移民させたことである。このことで、安定した単一民族社会であったハワイを今日のような多民族社会へと変容させていったのである。

表4 ハワイアン人口推移

調査日	総人口
1831-32 3/	130,313
1835-36 4/	108,579
1850: January	84,165
1853: Dec. 26	73,138
1860: Dec. 24	69,800
1866: Dec. 7	62,959
1872: Dec. 27	56,897

出展：米国商務省統計国勢調査局

このように複数の民族グループから構成されている社会は各地に存在する。ところが、ハワイのように民族間で頻繁に通婚が進んでいる地域はそれほど多くない。また、民族間の対立が生じることもほとんどなく、特定の移民集団だけが排除されることもなかった。ただ、ハワイ先住民だけが社会的進出から巧みに排除されてきた。彼らは土地を奪われ、アメリカ合衆国本土で他の先住民が認められているような居留地の権利も与えられていないのである。本土から来る白人たちは、高学歴で所得も高い。しかし、ハワイ先住民は平均すると、学歴や職業的な地位は低く、所得も少ない。このような貧富の差によって、「肥って怠惰な先住民」「積極的で決断的な白人」といった民族のイメージが固定されていった。

(3) ハワイアン・ルネサンス

このような固定されたイメージを変える先住民たちの意識改革の高まりが、1970年代のベトナム反戦運動と少数民族民族の権利要求運動だった。運動に立ちあがったハワイ先住民は、一つの成果として1974年に初めて正式にアメリカの先住民として認定され、対策事業を受ける権利を獲得したのである。この運動をハワイアン・ルネサンスと呼び文化、芸術、宗教など全般に及ぶ広範なうねりを見せた。そこでは、音楽や舞踊など、伝統芸術にも大きな変化がみられるようになった。ワイキキの観光地化が進み、観光客誘致の一つとして利用されたフラも、本来の精神を持った伝統芸術として飛躍的に洗練されるようになった。このきっかけとなったのが、メリー・モナーク・フェスティバルの創設である。

5. 新しいフラの創造 (メリーモナーク・フェスティバル)

メリー・モナーク・フェスティバルは1964年、ハワイ島ヒロで開始された。当初の目的は、大戦後、重要な産業であった砂糖キビプランテーションなど農業の衰退により停滞した町の経済の復興にあった。フェスティバルは「ハワイの歴史や文化に根ざしたお祭りにする」とし、宣教師から「みだらなもの」として長い間禁じられてきたフラを再生させたデビット・カラカウア王を祝うお祭りとしたのである。初めのうちは、カラカウアが王として統治した19世紀後半の時代の雰囲気を感じることだった。最大のイベントはパレードであり、ハワイ各地からやってきた高校生のブラスバンドや、米軍の軍楽隊の演奏にあわせてヒロの町を行進した。この時、フラもイベントの一つとして踊られたが、中心的なものではなかった。二回、三回と経るうちにマンネリ化を防ぐため新たな企画が必要となった。そこで、カラカウア王が再生したフラを中心にした競技形式のフラ・フェスティバルにしたのである。競技には、古典フラであるカヒコ部門と、新しい現代フラのアウアナ部門の二つのジャンルが決められた。フラ・カヒコは土着のもので、古代から伝わるものを基礎にしている。欧米の楽器は使わず、メロディに合わせて踊る「ダンス」ではない。立った状態で行うフラは、ハワイ語のメレ（詩）を唱えるチャンターの声とイプのリズムに合わせて、そのメレの主題を身体の動きで表現する。座って演じるフラは、踊り手自らがウリウリ、プイリ、イリイリなどと呼ばれる道具を使って音を出しながらメレを唱える。どちらもその動きはアウアナと比べると力強く激しく、迫りに満ちている。一方、フラ・アウアナは、20世紀に生まれたものとされ、ウクレレやギターなど欧米起源の楽器が奏でる旋律と歌声に合わせて「ダンス」を思い起こさせるような身体の動きで空、海、風、愛などを表現する。

フラ・フェスティバルは、年々高い技能と芸術性を競うコンテストに成長し、グローバル化の流れの中でフラに関する情報が世界各地に広がり海外の多くの人びとが関心を持ち、交通手段の発達とも相まって、ヒロまで見に来るようになった。町興しとして始めたフラ・フェスティバルは、今や世界の注目する一大イベントへと発展したのである。

こうして、フラは、その本来持っていた厳格で神聖な宗教儀式であると同時に、もう一つの娯楽性を備えた現代フラへと進化したのである。これにより、クム・フラ（フラ教師）達が、多くの人々が

忘れられつつある古典フラを復興させようと努力するようになり、さらには、古典フラに基づいて、あらたな「カヒコ」を作るようにすらなった。

娯楽性を備えた現代フラは、本土からの観光客誘致のための魅惑的な踊りではなく、フラそのものの意義と高い芸術性と美しさを持つ新たなフラとなって広く認知されるようになった。ここに、古典フラ「カヒコ」の創造の時代、現代フラ「アウアナ」の高い芸術性への進化が始まったのである。

6. 進化するフラ

世界各地の人びとが受け継いできた地域の伝統文化は数多くある。その中でも、地域を越え、民族を越えて多くの日本人に受け入れられたのは、ハワイアン文化のフラである。高い芸術性と精神性、力強さ、さらには美しさに共感し、多くの日本人がクム・フラのもとで教えを受けている。現在、日本におけるフラ人口は30万とも50万とも言われている。なぜフラが多くの人々の心を掴んだのであろうか。それは、フラが演ずる者と観る者双方の心を魅了する踊りであるということである。この魅力こそが、ハワイ先住民文化のフラを日本のみならず世界へと広げたのである。

2014年度、日本からハワイへの観光客は年間151万人（日本旅行業協会調べ）にもものぼり、日本人旅行者の旅行先第4位である。20世紀後半の観光客は、メディアによって作りあげられたイメージを確認したために訪れた。しかし、今日、ハワイを訪れる観光客は知的好奇心を体現したために訪れる。この違いは何であろうか。

巨大ホテルの林立するワイキキの通り、夕日のきれいなワイキキの海岸、毎夜催される南国ムード溢れるフラのショー。全てが日本と異質な時間と空間の外国である。すべてが、初めて体験する「南国の楽園」である。この異質な時間と空間を再度体験したくてまた訪れる。リピーター化現象である。ハワイが世界の観光リゾート地となった所以である。日本と異質な時間と空間を提供してくれる観光地はほかにもたくさん存在する。しかし、ハワイはそれらの地域のリピーターより、さらに多くのリピーターを生み出す。ハワイの島々にはオアフ島を中心に、大自然の中に近代的設備を備えた優雅で、快適な大型ホテルがある。このホテルには日本での日常生活を可能にするすべてがあり、多彩な質の高いサービスの提供も用意されている。一步ホテルの外に出れば、そこには整備された街並みがあり、さわやかな貿易風が心地よく、周りの多くはアメリカ本土から来た白人観光客であり、外国を実感することが出来る。ショッピングも、高級ブティックから地元の人も日常的に利用しているショッピングセンターでのショッピングを楽しむことができる。異質な空間でありながら、基本的には日本の日常生活の延長線上の海外生活を楽しむことのできる「癒しの場所」なのである。訪れるたびに変わっているハワイを楽しむのである。だからリピート化する。もう非日常の生活を楽しむ場所ではないのである。

ハワイが世界のリゾートとして発展したのは、「地理的条件」、「気候」、「文明」、「文化」の諸要素が複合的に相乗効果となってすべてを体験できる場所だからである。その中心にあるのは伝統文化のフラである。古代の神々に捧げる神聖なフラは王権のよりどころであった。また、民衆の娯楽であったフラは、芸術性の高い美しいフラへと進化した。この二重の意味を持った先住民文化「フラ」は今日、ハワイ経済を支える重要な要素であり、且つ観光地形成に大きく貢献しているのである。

参考文献

- 1) 池澤夏樹 「ハワイ紀行」 新潮社 2000年
- 2) イザベラ・バード 「イザベラ・バードのハワイ紀行」 平凡社 2005年
- 3) 石森秀三編 「観光の二〇世紀」 ドメス出版 1996年
- 4) 後藤明 「南島の神話」 中央公論新社 2009年
- 5) 後藤明編 「ハワイ研究への招待」 関西学院出版会 2004年
- 6) 中嶋弓子 「さまよえる楽園」 東京書籍 1993年
- 7) 矢口祐人 「憧れのハワイ」 中央公論新社 2011年
- 8) 矢口祐人 「ハワイとフラの歴史物語」 イカロス出版 2011年
- 9) 矢口祐人 「ハワイの歴史と文化」 中央公論新社 2013年
- 10) 山中速人 「アロハ・スピリット」 筑摩書房 1987年
- 11) 山中速人 「イメージの楽園」 筑摩書房 1992年
- 12) 山中速人 「ハワイ」 岩波書店 2014年
- 13) 山中速人 「ヨーロッパからみた太平洋」 山川出版社 2004年

参考資料

- (1) 日本旅行業協会 「数字が語る旅行業」 2015年
- (2) HAWAII TOURISM AUTHORITY
- (3) 表1、2、3 米国商務省統計国勢調査局
- (4) 画像1、2 State of Hawaii: State Archives
1850年代のフラ・ガール